

# クルドとヨーロッパ

八谷まち子

「クルド」という語を聞くたびに、いつもメティンを思い出す。メティンは、筆者が観光で訪れたアララト山の登山基地であるドーバヤジット (Doğubeyazit) を拠点にガイドとして生計を立てているクルド人である。英語に堪能で、登山者のみならず観光客のためのガイドもいとわず、自分のHPも開設して、イスタンブールとワン (Van) 周辺一帯を頻繁に往復しているというエネルギッシュな仕事ぶりであった。そして、クルドの例に違わず、もてなしの心が広く、筆者も彼の自宅で夕食をご馳走になるという親切に与かった。この夕食のきっかけは、ドーバヤジットに滞在中に他の街で起こった事件でクルド人が犠牲になったことに抗議して、街中の商店が2日間の一斉閉鎖をしたことだった。滞在ホテルは朝食しか出していないで、どこにも食べる所がない。一斉閉鎖初日は、遊牧をしているクルド人家族の訪問と周辺観光であったが、ガイドをしてくれたメティンは、夕食に困るだろうと自宅へ招待してくれた。とても美しい妻と幼い子ども2人の家族が、アパートの建物の外見からは思いもよらないような、清潔でモダンな住居で暮らしていた。手作りの (クルドに限らない) トルコ家庭料理がテーブルいっばいに並べられ、英語は話せない美人の奥さんも子どももみんな一緒に食卓を囲んだ。一見恵まれた暮らしがそこにはあって、思わず「エルドアン内閣はクルドに対してどうですか」と尋ねたら、「約束は何ひとつ守らない、彼ではだめだ」と顔をゆがめていた。2012年9月のことである。

## ●トルコとEU

トルコは、1999年に欧州連合 (EU) 加盟候補国となり、2005年に加盟交渉が開始された。この公式な関係により、EU加盟へ向けたトルコの国内改革実施のための様々な支援がEUから提供されることになる。

その1つにトルコ国内の不平等の是正のための施策があるが、具体的には、クルド人が多数をしめる南東部の経済発展、「トルコ民族」以外の少数者集団の文化、人権の尊重を意味していた。そのためであろうか、ドーバヤジットの長距離バスセンターにもEUのロゴを付したプロジェクト説明の看板がみられた。とはいえ、これはEUがクルド人を特定の支援しているということではなく、あくまでも、トルコ国内の民主化という大きな事業の一環に対する支援である。その一方で、EUが毎年公表するトルコのEU加盟へ向けての『年次報告書』には、必ず、トルコ国内の「少数民族」としてのクルド人の人権尊重に関する記述がみられる。

## ●ダニエル・ミッテラン、レイラ・ザーナ、PKK

そもそもヨーロッパにおいて、広く「クルド」の状況が一般に知られるようになったのは、イラン・イラク戦争ではないだろうか。1988年3月にイラク軍が大量の化学兵器の使用により、約5000人のクルド人を殺戮したことはヨーロッパでも衝撃を持って報道され、歴史のなかで置き去りにされかけていたクルド問題へ新たな焦点をあてた。

そうした状況のなかで、「クルド人問題」としてヨーロッパでの認識の喚起に重要な役割を果たしたのは、元フランス大統領ミッテランの妻、ダニエル・ミッテランであった。彼女のクルド支援活動は日本ではほとんど知られていないようだが、彼女は1989年5月にディヤルバキル (Diyarbakır) を訪問している。これは、表向きはイラク難民となったクルド人への支援調査のためとされているが、実際はトルコ系クルドへの強力な支援活動であったようだ。ダニエル・ミッテランは「クルディスタンとは、2600年もの間独立を奪われ、隷属と死へ押し込められ、5つの国家に分断されている2000万の人々の故郷である」と述べているという。

彼女の信念は固く、ディヤルバキルでは賛同者のみと面談し、アンカラでのトルコ大統領夫人主催の晩さん会には、クルド系ビジネスマンは招待されず、オザル大統領夫人との間ではクルド労働者党（PKK）についてのかみ合わない会話があったという。しかし、彼女の功績であろう、1989年10月にはクルド問題に関する初めての国際会議がパリで開催され、クルド系トルコ国会議員7名が参加した。さらに、パリ市内の古いが瀟洒な建物のなかにヨーロッパで初めての「クルド学院」が設立され、フランス大統領が交代した後も存続した。国外に逃れているクルド人にとっての聖地のような場所であるうえ、PKKの影響が比較的弱い稀なセンターであったようだ。

しかし、フランスにおけるこうした好意的な風向きも、ミッテラン大統領の退陣とともに弱まっていった。それに代わって、EUとして人道主義の立場からクルド問題が言及されることが増えた。まず、1991年には欧州理事会が、湾岸危機によるクルド人その他の難民への緊急人道支援を承認している。1995年には、欧州議会（EP）が基本的人権の確立への貢献者として表彰する「サハロフ言論自由賞」を、クルド系女性国会議員レイラ・ザーナに与え、その意義について、以下のように述べている。「レイラ・ザーナへの賞の授与は、欧州議会がトルコにおけるクルド問題の平和的解決、人権擁護のために戦う人々を支持することを示すメッセージである。」この授賞は、EUのクルド理解という観点から象徴的である。トルコのクルド系政党は、クルド分離主義にたち武装闘争を繰り返すPKKと何らかの結びつきがあることは多くの人々が理解していることであつたし、ヨーロッパでの武装闘争が1993年頃には過激化しており、EU加盟国はPKKをテロ組織とみなすようになっていた。その一方で、特にトルコ国内のクルド政策は非人道的かつ非民主的であるとして、EUは批判的であった。即ち、ヨーロッパにとって「クルド」とは、国際社会の人道的支援の対象であると同時に、忌むべきテロリストという認識もあつた。

## ●EU加盟交渉のなかのクルド

すでに述べたように、EUはクルドを特定した何らかの政策を打ち出しているわけではない。EUの加盟候補国には、民主主義、少数者集団の人権保護、法による統治、市場経済という4つの基準に沿った国内改

革が求められている。トルコの加盟交渉準備という枠内に限って言えば、マイノリティーの権利保障の観点から、クルド語による放送や学校教育を許可することを具体的な課題として指摘していた。こうしたクルド文化の一部を公的に認めるというトルコにとっての画期的改革は、エジュヴィット首相の下で実現された。

この間、前述のミッテラン夫人の国際会議に参加した7名の国会議員は、帰国後、当時の社会民主党の党籍を剥奪されたが、それをきっかけに、クルド民族主義を代表する初めての合法的組織として、人民労働党（HEP）が1990年に設立された。周知のようにこの政党の行く末は厳しく、トルコ選挙法が定める10%条項に阻まれるのみならず、党の閉鎖や党名の変更などを余儀なくされ続けた。しかし、誤解を恐れずに敢えて言えば、「クルド問題」がトルコ国内で現実問題として認識され始めていた時期に、ミッテラン夫人の偏執なまでの後押しが、少なくとも、トルコにおけるクルド民族を取り巻く状況に風穴を開け、公の場で議論していく力学をもたらしたのではないかと思われる。

EU加盟交渉が開始されて12年が過ぎたが、トルコの加盟実現は遠のく一方にみえる。中東地域の混乱によってトルコの外交も国内政治も閉塞感を高めている。そのなかでクルドと政府との関係は、休戦合意が破棄され対立が先鋭化している。EU加盟準備のための改革がトルコの民主化を大きく促進させる成果を得たことは事実であり、その成果をまえにして、EUはトルコとの加盟交渉を真摯に継続するべきであった。EUにその力強さがあったならば、少なくともトルコの「クルド問題」は違った様相となりえたのではないだろうか。わずか5年前に、とりたてて不安を感じることもなく訪ねることができたトルコのクルディスタン地域へ思いを馳せて、メティンのことがまたもや頭をよぎる。

（はちや まちこ／九州大学EUセンターアドバイザー）

## 《参考文献》

- ① Nicole and Hugh Pope, *Turkey Unveiled: Atatürk and After*, London: John Murray Ltd., 1997.